

「被害の語りを集積する」ことの検討 村上春樹『アンダーグラウンド』の論理を読む

山口 真 紀

(兵庫県立大学／立命館大学大学院先端総合学術研究科 一貫制博士課程)

1. はじめに——「傷つきを語る」実践

近年、凄惨な出来事や、社会的不正義をめぐる事象について、その問題の解明・解決とともに、当事者の経験や内的葛藤を理解することの必要が叫ばれている。例えば阪神・淡路大震災時における PTSD の概念の流通は、物理的な損害からの復興とともに被災者の「こころのケア」もまた重要な課題であるとの認識をもたらした。司法においても、加害の特定や問責の妥当性に加えて、被害者救済のための手立てが模索されつつある。「傷」という、外からは見えず定量化できない「感情」をいかに理解し、どのように救済・回復に導くかといった問題は、既存の制度においても具体的な支援の現場においても重要な課題となっている。「傷」の救済・回復をめぐることは、当事者が自身の「傷つきを語る」という営みに、その解決の糸口が探されてきた。ただし、「傷つきを語る」ことは「原因を探し、理解し、言語化する」といった自己点検や自己の論理化あるいは自己内省の営みであり、困難や痛みやリスクが常に生じ得るものである〔山口 2014b〕。にもかかわらず当人の負担の側面は往々に、回復のための二次的な問題として背景化させられている。そればかりか、「語る」営みを推奨する言説はこれを傷ついたひとの倫理的実践課題として定位すらする〔Frank 1995〕。「傷つきを語る」営みが価値づけられるとき、「沈黙」や「やり過ぎ」といったような傷に処するための営みの様々は捨象され、傷ついたひとに「語る」営みを要請することが正当化されるのである〔山口 2009〕。現在、積極的に評価されている「傷つきを語る」ことをめぐる実践について、「誰にとって、なぜ良いのか（あるいは良くないのか）」という視角から精緻に検討する必要がある。

「傷つきを語る」実践として本稿で着目するのは、被害の語りのアーカイビング（収集・保存・呈示）である。現在、災害などの理不尽な事件の被害体験を、出来事の証言あるいは文化資料としてアーカイビングする動きが

様々なかたちで生起している。すぐに想起されるのは、2011年3月11日に起きた東日本大震災および東京電力福島第一原子力発電所の事故後に取り組みされている試みであろう。例えば日本放送協会（NHK）は、HP内に「東日本大震災アーカイブ——証言 web ドキュメント」を展開し、被災者の当日の行動やその後の生活、心情、支援者の活動などを取材し、記事と動画による公開の更新を続けている。また社会学者の仕事としては、自身も被災者である金菱清が被災後約半年の間に記された被災者の手記集を編集した『3.11 慟哭の記録』がある。マスコミなどの報道が、地震直後は津波の映像や、原発の無音の爆発などの衝撃的な映像で埋め尽くされていたのが、時を追うごとに計画停電などの首都圏の関心ごとにとって代わられていくさまを金菱は目の当たりにしたという。金菱は「上から津波の映像を眺めているだけでは、現場で生じている“小さな出来事”はわからない」とし、被災者の個々の経験に着目する意義を説いている〔金菱 2012:vi〕。こうした試みは行政による主導のみならず、メディアや専門家、地域住民による草の根の活動においてまで展開されている。

では、この試みを支える論理とは一体どのようなものだろうか。アーカイビングの「必要」は、例えば「あの時、何が起こり、人々はどう行動したのか」といった事実の記録、あるいは「復興支援と防災のためにできること」といった未来への教訓、さらに資料散逸を防ぐための火急的措置として、強い使命感とともに語られる〔NHK〕。ただしこれらは、被害者ではない私たち「社会のための」論理である。一方で、自らの被害体験を言語化し他者と共有することで、当事者における傷の回復が促されるとも語られる。ただし既に述べたように、「傷つきを語る」ことは非情な困難を伴うことがある。さらに「語り」の扱いをめぐることは、理解可能であるように合理的な形式にあてはめることが、当事者の感情の本質を歪め、当事者に生じている苦痛をより深刻にさせるとも言われている〔Kleinman 1997〕。

他方で、被害の語りのアーカイビングは、公文書やモ

ノに基礎づいていた集合的記憶を、個人的な経験の「語り」の集積から編成していく新しい実践として捉えられている。この点について、博物館や文化遺産施設の「記憶保存装置」としての機能を指摘する小川は、「証言」の展示は記憶そのものを保存対象とする新しい動きであるとして、記憶が個人的な創成物であったとしても他者と共有しうる一般性を備えたメディアとなり得ることを示しながら、同時に「負の出来事の保存」は、翻って個人における記憶の保持を不必要にしていく作用を持つと指摘する。「あらゆるモノや出来事への保存への欲望は、実は、忘却への欲望によって成り立っており、ひとは「忘れてはならない」記憶を、博物館に赴くことによって「忘れることを赦される」〔小川 2002:62-66〕。小川の議論を参照すれば、「傷つきを語る」実践は、社会の側の「記憶しなければならない」という意識と「忘れることを赦されたい」という欲望の拮抗の調停のために当事者に要請されていることになる。

以上のように、被害の語りのアーカイビングという新しい試みにおいては、「社会における効用」と「当事者における効用」が混在しているか、弁別されないままに論じられている。本稿では、被害の語りのアーカイビングを支える論理基盤について「誰にとって、なぜ良いのか」という視角から精査することを目的として、こうした試みの嚆矢に位置付けられる村上春樹の『アンダーグラウンド』を取り上げ、編纂企図および成果について整理する。この作業を通して、被害の語りの集積に託した村上の狙いを浮上させ、語りをめぐる扱いと〈感性〉についての理解から批判を試みる。

2. 『アンダーグラウンド』の位置づけ ——被害の語りのアーカイビング

『アンダーグラウンド』は、村上春樹が地下鉄サリン事件の被害者62人へのインタビューを採録して発刊したノンフィクションである。地下鉄サリン事件は1995年3月20日に発生した東京の地下鉄に猛毒サリンが撒かれるという一般市民を対象とした無差別テロである。被害者は、死者13人を含め6200人。麻原彰晃を主犯とした新興宗教であるオウム真理教信者が実行犯とされている。地下鉄サリン事件は、同年1月の阪神・淡路大震災とあわせて「時代のカタストロフ」を象徴する出来事として当時広く理解されており、村上春樹自身もまた「私たちの精神史を語る上で無視することのできない大きな里程碑」と述べている。

地下鉄サリン事件を考察した言論が多くあふれていた当時において、『アンダーグラウンド』は各所に大きな衝撃をもって受け止められた。最も大きな理由は、日本を代表する作家・村上春樹が初めて手掛けたノンフィクションであり、あとがき「目じるしのない悪夢」という比較的短い文章の中で、サリン事件を通して戦後日本の社会批評を試みている点である。若い世代の価値観を先取りし、高度経済成長の個人主義のシンボルであった村上は、これまで「大きな事件や大仰な言葉で世界を語ることを何よりも避けてきた」〔川本 1997 → 2006:195〕にもかかわらず、ノンフィクションを手掛けることで現実コミットメントし、さらに自身の社会的責任について触れたことに、文芸批評家だけでなく一般読者も高い関心を寄せた¹⁾。ただし本稿で着目するのは、『アンダーグラウンド』における被害者の社会的包摂をめぐる実践としての側面である。

『アンダーグラウンド』の特徴は、地下鉄サリン事件の被害者にのみ着目し、インタビューに紙幅のほとんどを割いている点である（二段組み700頁以上、厚さは4.5cmを超える）。現代において、犯罪被害者とその遺族を主題に扱う出版物や研究は少なくない。犯罪被害は古くからノンフィクションの主要なテーマであり続けてきた。しかしながら、社会的あるいは学術的に「被害者」が注目されるようになったのは、比較的近年のことである。犯罪をめぐる関心が、加害者の先天的要因や社会的環境に偏っているとの反省から興った被害者学が日本において被害者学会を設立したのは1990年のことである。また同学会所属の研究者や実務家によって、警察庁の協力を得た全国的な「犯罪被害実態調査」が実施されたのは1992年であった。『アンダーグラウンド』の発刊は、まさにそうした「被害者」の社会的包摂が課題として認識されはじめた90年代半ばに位置づいている²⁾。

とりわけ被害者の「語り」に照準したことについては、当時まだ少なかった「被害者の証言記録」として資料的な価値を持ち、ノンフィクションライターだけでなく宗教学者、また被害者学の分野からも「本当は私たちがしなければならなかった」〔中島 1998:79〕仕事として高く評価されている。ただしもちろん、被害者学においても、救済と支援を主要な目的として被害者処遇の実態調査や被害者感情を分析するためのインタビュー調査は進められてきた〔宮澤他 1996、佐藤 2003、小西 2006〕。例えば交通犯罪被害者遺族を対象に「回復」過程を調査した佐藤恵は、遺族の手記やインタビューから彼／彼女らの内面的な解釈過程を考察し、遺族感情が「遺志の社会化」へ

と向かう様相を描き出している。しかしながら「語り」の扱いに照準するならば、先に挙げた「犯罪被害実態調査」においては25名の被害当事者のインタビュー調査が実現しているものの公開はされていない。また研究発表の場合では、実際には多数インタビューが実施されていても、形式や紙幅の都合から限られた人の語りしか引用することができず、さらに「悲嘆」「怒り」「回復」「喜び」などを示す箇所についての部分的な引用を余儀なくされてしまう。一方で『アンダーグラウンド』は、後に詳述するように、62名の被害者の語りが「ありのままのかたち」〔村上 1997:24〕採録されることに注意が払われている。被害者学の中島が「被害者の証言を日常に密着した形で一つ一つ丁寧にとりあげることは、研究者による社会調査では限界がある」〔中島 1998:79〕と述べていることから、被害者の詳細なインタビューの質をそのままに公開することについては、当時において実現の方途が探られている最中であったことが推察される。以上から、『アンダーグラウンド』の試みを現在積極的に進められている被害の語りをアーカイビングしていく試みの嚆矢として位置付け、以下の考察をすすめたい。

なぜ、村上は被害の語りに注目したのだろうか。『アンダーグラウンド』編纂の動機について村上は、「東京の地下では本当に何が起こったのか？それが私の抱いていた疑問だった」とだけ記し、必ずしも明確にはしていない。次節から、「疑問」の内実を三点抽出し、『アンダーグラウンド』の試みに結実した理路およびその成果について整理する。

3. 『アンダーグラウンド』の編纂企図

——本当に何が起こったのか？

まず村上の言葉に従って、『アンダーグラウンド』の試みの動機を整理しよう。村上は次のように表現している。「一九九五年三月二〇日の朝に、東京の地下では本当に何が起こったのか？それが私の抱いていた疑問だった。とても単純な疑問だ」〔村上 1997:687〕(強調は村上による)。ここで記されている「単純な疑問」には、いくつかの位相の問いが含まれている。

一つは、「その場に遭遇した人々の「現実」とは何か」という疑問である。村上はマスコミ報道や知識人の関心が「加害者＝オウム真理教信者」の狂気や悪性に偏重していることへ懸念を示し、以下のように記している。

「地下鉄の列車の中に居合わせた人々は、そこで何

を見て、どのような行動をとり、何を感じ、考えたのか？」(…)乗客一人ひとりについて細かいところまで、それこそ心臓の鼓動から息遣いのリズムまで知りたかった。(…)ごく普通の市民が、東京の地下でこのような思いも寄らぬ異様な大事件に巻き込まれたとき、そこではいったい何が起ころのだろうか？」〔同:688〕

出来事に巻き込まれた群衆のひとりひとりはどうのようにならにそれを経験したのか。村上はマスコミなどの報道から漏れ落ちている、被害者の受けた恐怖や痛み、後遺症に特に注意を払い、地下鉄サリン事件の報道されていない「現実」を解明しようとした。

二つに、「[「加害者」批判に依らない事件の描き方はないか]という疑問である。村上は本事件を取り巻くマスコミなどの理解が、〈オウム真理教＝悪＝あちら側〉／〈正常な社会＝善＝こちら側〉という構図を無批判に踏襲していることを指摘し、この二項対立の構図の棄却を試みようとしている。

「私たちがこの不幸な事件から真に何かを学びとろうとするなら、そこで起こったことをもう一度別の角度から、別のやり方で、しっかりと洗いなおさなくてはいけない」〔同:690〕

「別の角度から、別のやり方」として村上が採用したのが、「加害者」ではなく「被害者」の経験への着眼である。地下鉄サリン事件を、「非道な加害者」の動機を調べ、当日の行動記録をたどることによってではなく、乗客の一人ひとりの生活や家族構成、人生のトラブルやドラマを描くことによって、出来事の多層性を表象することによって、加害者の逸脱や排除の理論ではない、地下鉄サリン事件の別様の表象可能性を模索したのである。

三つ目の疑問は、より根源的な問いである。「出来事を引き起こした原因は何か」。この点についての直接的な記述はない。とはいえ、『アンダーグラウンド』には「なぜ起こってしまったのか」をめぐる考察が随所に織り込まれている。例えば、以下のような記述からも窺うことができる。

「我々が平常時に〈共有イメージ〉として所有していた(あるいは所有していると思っていた)想像力＝物語は、それらの降って沸いた凶暴な暴力性に拮抗しうる価値観を提出することができなかつた」

〔同:716-717〕

ここで村上は明確に、地下鉄サリン事件を「物語の敗北」として認識している。彼の言葉に従えば、オウム真理教とは麻原彰晃が作り出した「荒唐無稽な物語」である。「荒唐無稽な物語」でありながら、それを信じる人々があり、実際に一般市民を殺傷するに至ったのは、「こちら側」である我々の社会が、それを「放逐できるだけのまっとうな力」をもつ物語を持っていなかったことが原因である。そこで村上は「荒唐無稽な物語」を放逐する力を、被害者の語りの集積に見出していこうとする。『アンダーグラウンド』においては明示されていないが、続編として記された『約束された場所で』（1998年）の中で、村上は心理学者・河合隼雄との対談中に以下のように述べている。

「僕はあの本を書いていて思ったんですが、社会そのものにはあの事件を防ぐだけの抑止的なワクチンは備わってなかったけど、人々の一人ひとりの語る物語の中には、やはりたしかな力を感じるんです。潜在的な力というか、そしてそれらの物語をひとつひとつ集めて積み重ねていけば、そこには何か大きな勢力が生まれるのではないかと。」〔村上 1998:289〕
(下線部は筆者による)

村上は本著において、被害者の語りの集積に、「たしかな力」を見出そうとしている。いったいその力とは何だろうか。それはどういった勢力となって、「荒唐無稽な物語」を放逐すると村上は考えているのだろうか。以上の検討を進めるために、次節では、編纂方法の整理を通して、『アンダーグラウンド』の成果と狙いをまとめる。

4. 『アンダーグラウンド』の成果と狙い ——出来事とメッセージの厚み

『アンダーグラウンド』のインタビューイの選定は公募でなく、各種マスコミで報道された名前から、あるいは人づてに、作家側から身元にたどり着いた約140人への依頼だったという。登場する人びとは、被害者の遺族、後遺症によって入院生活を余儀なくされている人、その家族、救護活動を行った人、重症・軽症ともに治療を受けた人、自分を事件の被害者ではないと述べる人など、サリン事件への関与の深度は様々である。インタビューイは被害のあった地下鉄3路線の各章に割り当てら

れ、仮名あるいは本名で節に分けられている。各語りの前には、作家の主観による人物描写が挿入されている。例えば「大学時代柔道をやっていたというだけあって、体つきもよく、しっかりと前を見て明確に話をする。外見は若々しく、着こなしもさっぱりとして、なかなか素敵なネクタイをしめている」など、読者は作家からの紹介(=「物語」への誘い)を受けた上で、本文に目を移すことになる。

はじまりの多くは、当日の朝の仕度や、通勤ルートの説明である。3月20日の行動をなぞりながら、どのような仕事しているか、なぜその仕事に就いたのか、出勤から入眠までの時間の過ごし方、家族構成、大事にしていることなど、地下鉄で遭遇した経験とは直接関係を持たない個人的な情報が織り交ざってくる³⁾。出来事そのものの描写だけではなく、その人が現実に向き合ってきた心情、すなわち怒りや諦め、困惑、無関心、教訓、人生観などが流れに沿って挟み込まれていくのである。

さらに注目すべきは、村上のインタビューに臨む際の禁欲的な態度である。村上は、各個人における回復の段階や支援の必要性や心の機制についての分析・解釈を挟まない。インタビューイから「どう思いますか?」と尋ねられる場面でも「わかりません」と答えており、対象者と「共に考える」ことも慎重に避けられている。そのため、聞き手からの質問が記述されることは少なく(実際には細かい応答が交換されているのだとしても)、そのほとんどがインタビューイの一人語りの形式で採録されている。

こうした姿勢は、特定の理解枠組みに被害を還元せず、偶然居合わせた人々の固有性を尊重することへの意思を示している。被害者の経験を編纂するにあたって、このような姿勢がもたらす効果とは何だろうか。例えば以下のような語りは、必ずしも「自らの被害を理解してもらえないことへの諦念」として理解されるものではなく、被害者が地下鉄サリン事件を自身の人生で遭遇した一場面として感受しているという側面を示している。

「徒労感……それはもちろん感じますが、それがサリンのせいかどうかは、わかりませんね。年齢的な衰えというのはありますし……。ええ、物忘れも最近激しくなったなという感じはあります。でもそれははっきりと原因はわからないですね。……でも中高年ですから、これもよくあるパターンかな。みんなどっちはわからないという、グレーゾーンですよ。」〔村上 1997:495〕

「もう既に一回は死んじゃっているんだ」と思うことはあります。そうすると何かふっきれたような感じがして、「そうだ。なにごとによらず迷うことなく、前向きにやっ払いこう」って考えられるんですよ」〔同:616〕

自身に残った何らかの症状を「被害」として同定しない、あるいは自分の人生を前向きに捉える契機として語るインタビューからは、法社会学者の河合幹夫も『アンダーグラウンド』に触れて「被害者が加害者を恨むこと自体が自明でない」〔河合 2000:146〕と述べるように、被害者はいつも「被害者」として自己を存立させるわけではないという事実を知らせてくれる。村上が摘出した語りは、我々が通常イメージしている「被害者」像を揺るがすような力を持っているのである⁴⁾。

一方でノンフィクションライターの吉田司は、村上のインタビューにおけるスタンスを「被害者の傷口の痛みを刺激しないような〈距離感〉」と批判し、『アンダーグラウンド』を「市民的平和のわりと退屈な破滅譚がずらーっと並べられるという、起伏の少ない展開」と評している〔吉田 1997〕。確かに、記されている被害者の語りは、地下鉄サリン事件の被害者の会が1997年にまとめた「黄色い冊子」と呼ばれる『手記集』〔地下鉄サリン事件被害者の会 1997〕や、事件から3年、『アンダーグラウンド』から1年後に発刊された約42人の手記集『それでも生きていく』〔地下鉄サリン事件被害者の会 1998〕に収められた被害者の語りとは明らかに語りの質が異なっている。それらは対照的に、警察の対応や病院側の不手際への苛立ち、怒り、事件を忘れないで欲しいという懇願、事件後の生活上の困難、報道への不満が訴えられ、時には叫び声のようにも記されている。しかしこの語りの熱量の異なりをもって『アンダーグラウンド』を「ノンフィクションではない」「著者の恣意的な誘導がある」として批判することは、この試みの本質を捉え損なっているだろう。なぜなら村上は、吉田が述べた「市民的平和のわりと退屈な破滅譚」の提示こそを目指していたからである。

では、村上が被害者の語りに見ようとした「大きな勢力」とは何を指しているのだろうか。先に見たように、村上は地下鉄サリン事件を「起こるべくして起こった事件」であったと直感している。タイトルの『アンダーグラウンド』に込められているように、著者は〈あちら側〉と〈こちら側〉を地下茎でつながれた「同質」のものと理解している。言うなれば我々の社会そのものにオウム真理

教なるものを生み出す素地があったのだと。例えば、サリンによる後遺症について上司や同僚の理解が得られず失職したという投書を挙げながら、被害者が受けた被害を、事件そのものによる暴力と、職場の無理解という「二重の暴力」であると述べ、被害の根幹を、想像力を欠いた日本社会の心性に帰結させている。さらに、この状況を以下のような言葉で憂いでいる。

「人々の多くは複雑な、「ああでありながら、同時にこうでもありうる」という総合的、重層的な——そして裏切りを含んだ——物語を受け入れることにはや疲れ果てている」〔同:702〕

地下鉄サリン事件を単純な二項対立で理解してしまうように、現実が総合的、重層的であることを想像できない日本社会の心性が、麻原彰晃の「荒唐無稽な物語」を呼び出し、その採用を許し、一般市民の殺傷に至らせてしまった。さらには、被害者であるひとにさえ、その痛みへの無理解という（二次被害の）暴力をふるってしまった。この認識に立つ著者は、地下鉄サリン事件の克服を、社会を生きる普通の人々の経験への想像力を鍛え上げることによって果たそうとした。

『アンダーグラウンド』の成果について、本節では次のようにまとめよう。村上は、被害者の経験の多様な在り方を示し、3月20日の地下鉄や病院で偶然居合わせたひとりひとりの固有の経験を書き込むことによって、地下鉄サリン事件を、多様な人々が出会う〈立体交差の場面〉として描きだすことに成功した。そして、人々の物語の集積によって、すなわちまさに語りの「厚み」によって、以下のメッセージを読者に〈感覚〉させようとした。社会が複雑で多様なこと、ひとの生がどれも不確かなこと、その中で人々はそれぞれに現実と折り合いをつけながら生きていること。

5. 『アンダーグラウンド』への批判 ——語りの道具化／想像することの痛み

前節までで確認したように、『アンダーグラウンド』の狙いは、地下鉄サリン事件を起こすに至ってしまった「想像力を欠如した社会」に処方箋を提示することにあった。本節では、村上の試みを批判的に検討したい。中心を成す問いは、被害者の語りが、そこでは「道具」として持ち出されているのではないかというものである。被害者の語りは、村上の想定する無感覚な社会成員の想像力の

醸成のために機能させられているためである。

語りの道具化についての批判は、被害者の体験を「物語」として編纂する手つきに対しても該当する。例えば大塚英二は、事件によって脳機能の一部が損なわれ、十分な意思疎通ができない明石志津子さんへのインタビューにおいて村上の言葉で彼女の所作に解釈が加えられている点を挙げ、「語りえない」被害者に著者独自の「物語」形式が当てはめられていることを指摘している〔大塚 2004:78〕。村上はインタビューに際して禁欲的な態度に徹しながら、しかし自身の主観によって「物語」を編集することからは逃れられなかったのかもしれない。そのひとに生じている苦痛や悲しみを他者にも理解可能であるように表象する試みは、経験の個性性を奪い、鋳型にはめてしまう可能性をもっている。ゆえにこうした試みは「当事者の言葉を篡奪する」、「多様な経験を縮減化する」行いとして批判的に検討される必要がある⁵⁾。

しかしながら、知らされてこなかった被害者の経験を「丁寧」に「多く」集め、そこから読者の想像力を呼び覚まそうとする『アンダーグラウンド』の目的に照らせば、上記の批判は「注意を払うべきではあるが、二次的で外在的な指摘である」と捉えられるかもしれない。そこで、村上がなぜ「想像力の欠如」を言挙げするのか、いま一歩踏み込んで検討したい。

オウム真理教信者（当時）へのインタビューを採録した『約束された場所で』において、村上は信者の全員に「あなたは思春期に小説を熱心に読みましたか？」と問いかけたという。後にこのインタビューを振り返った際、村上は「だいたいの答えはノーであった」と述べ、次のように続けている。

「ご存知のように、いくつもの異なった物語を通過してきた人間には、フィクションと実際の現実のあいだに引かれている一線を、自然に見つけ出すことができる。その上で、「これは良い物語だ」「これはあまり良くない物語だ」と判断することができる。しかしオウム真理教に惹かれた人々には、その大事な一線をうまくあぶり出すことができなかつたようだ。つまり、フィクションが本来的に発揮する作用に対する免疫性を身につけていなかったと言っているかもしれない。〔村上 2011: 204-205〕

村上は、「物語」を読むこと（「想像力」＝「物語」）〔村上 1997:717〕の機能を、フィクション／現実、良い物語／良くない物語を峻別する目が養われることに求め

ている。そしてオウム真理教の信者の「失敗」を、想像力の未成熟さに見出し、同じ図式を麻原の提示する物語を受容し、被害者への二次被害を生み出した社会の在り様と重ねている。すなわち村上は、オウム真理教信者とそして社会が「現実に採用してよい物語」に対する分別がないと判断している。さらに着目したいのは、オウム真理教信者に対する次のような、確信を含んだような問いかけである。

「あの、あなたは小説って読めないでしょう？」〔村上 1998:35〕

「誰の人生の中でもすごくつらかったり、悲しかったり、落ち込んだりということはあるんじゃないかと思うんです。存在を根本から揺さぶるような。あなたの場合にはそういう経験は全くなかったんですか？」〔同: 89〕

村上は、信者が小説や物語へと向かわない原因を個人の経験に帰して問うている。これらの問いかけを通して村上は、オウム真理教の提示する物語ではなく、自分自身の経験から立ち上げた理解をもって社会を生きていかなければならないと伝えようとしたのだろう。信者に対する励ましや呼びかけのつもりだったのかもしれない。しかし「小説って読めないでしょう」「存在を根底から揺さぶるような経験はなかったんですか」という断定的で性急な問いかけには、信者の喜怒哀楽や他者への共感などの〈感性〉の平板さへの苛立ちが滲んでいる。自身と信者のあいだの生育環境や経験の質といった社会的な側面、そして感受性の在り方の差異についての想像を手放してしまった上記の瞬間から炙り出されるのは、オウム信者や社会成員が持つ〈感性〉に対する村上の、決定的な不信である。そしてこの不信は、少なくとも上記の瞬間は、村上において想像力の可能性よりも強く信じられている。『アンダーグラウンド』は、想像力を醸成するための個別の事例としてというよりも、〈感性〉の平板さを告発し、無感覚な人びとを叩くために編まれたのではないだろうか。すなわち、個々の経験は、まさにその物理的な「厚み」によって信者と社会成員一人ひとりを圧倒するために収集されたのである。このとき、被害者の個性は、経験の様々を提示するためではなく、「厚み」に貢献するためのものとなる。『アンダーグラウンド』において被害の語りは、想像力の欠如した「社会のため」に、被害者の名前が付けられた道具となっているのである。

一方で、「想像力を働かせる」という方策は、例えば二

次被害を生み出す社会において解決策となるのだろうか。被害者遺族の高橋シズエは、地下鉄サリン事件被害者の会代表世話人としてその心境や境遇を法廷やマスコミに訴えてきたが、村上のインタビューには応じず、地下鉄サリン事件被害者の会代表として手記集を発表した⁶⁾。高橋は、『アンダーグラウンド』における故人の死をめぐる記述に対して、次のように述べている。

「この本の中には主人のことが書かれているとわかっていましたから、どうしたって、嫌だと思ながらも、その部分だけは読まずにはられません」
〔高橋 1997:54〕

「『アンダーグラウンド』を読んで、まさに、死んだんだよ、こういうふうにして、こうやって、こういう状況で死んでいったんだよ、ということを認めさせられてしまった。否定し難い事実をつきつけられて、どうしても認めざるを得ないことに、こんなに早くなるとは思わなかった。それが、当事者の私としては、とても辛かった」〔同:55〕

上記の言葉からうかがえるのは、故人の死について知らなければならないという思いと、知りたくない（あるいは、認めたくない）という思いの拮抗であり、両者の間で引き裂かれそうになっている遺族の苦しみである。被害の語りの集積は、その厚みを持って読者に想像力を喚起させるものであった。しかし、被害者遺族である高橋にとって、『アンダーグラウンド』は「とても読み通すことはできない」ものとして〈感性〉されている。そして高橋にとっては、事件から2年経過しても「こんなに早く」、すなわち故人の死を受け入れるよりも前に故人の死の事実を突きつけるものとして、受け取られているのである。

また高橋は、麻原彰晃を含む被告への思いを次のように述べている。

「夫が受けたらろう苦しみ、呼吸困難になり、からだ が痙攣（けいれん）し、神経が麻痺し、あっという間に息絶えてしまった苦しみを、被告らにも味あわせてやりたい」〔同:62〕。

ここからは高橋が、自分を見ることのなかった、また決して知ることのない故人の死に至るまでの苦しみを具体的に想像し、その苦しみへの思いから加害者に許しがたい怒りを覚えていることが読み取れる。もしかすると、

遺族である高橋の苦しみとは、故人が死に至るまでに感覚した苦痛を想像してしまうことそれ自体にあり、その営みを止められないことでもあるのかもしれない。東日本大震災の被害をめぐる報道において、津波の映像が自粛されるに至ったのは、黒い水の塊しか映っていないにもかかわらず、視聴者がそこにひとや生活がのみ込まれていくことを想像し、そのことから派生する悲しみや苦しみを想像してしまうからではなかったか。そして、安全な場所にいるひとであっても、他者の苦しみを自分に起きている事柄のように〈感覚〉することがあるためであった。

以上から考察されるのは、村上の想像力への認識とは対照的に、〈感性〉を豊かに持つひとでもまたフィクションと現実あるいは他者と自己を明瞭に切り分けることが難しいのかもしれないこと、またひとは実際に、他者の苦しみを想像し、想像することの痛みの中をこそ生きているのかもしれないという側面である。想像力が苦しみの源泉としてもあるなら、「想像力を働かせよ」という主張とそのための実践は、被害者にとってはより痛みへと向かわせる力としても作動する。であるならば、被害者の社会的包摂に対する社会の無理解や不寛容に対しては、想像力や〈感性〉に訴えるのではないやり方で対抗しなければならぬのではないだろうか。

6. おわりに——社会を問題にする

本稿では、被害の語りのアーカイビングをめぐる実践として『アンダーグラウンド』を取り上げ、編纂企図と成果について整理した。『アンダーグラウンド』は、地下鉄サリン事件の被害者の、必ずしも「被害」にのみ焦点化しない生活記録としてのインタビューを多く採録することで、当時まだ取り組まれていなかった被害者の行動記録集提示し、地下鉄サリン事件を多様な人々の経験が会う「立体交差の場面」として表象することを可能にした。その上で本稿では、この実践を導引していたのは村上自身が抱えている、社会成員に対する〈感性〉への不信であったと述べた。村上は、「出来事を引き起こした原因は何か」という最も根源的な問いの答えを社会の「想像力の欠如」に求め、経験者の語りの量的・質的厚みをもって読者の〈感性〉に訴えかけようとしたのだ。しかしながら、負の出来事の継承と検証のために、被害にあったひとの語りを持って読者の〈感性〉に訴えかけることは、無批判に肯定されることだろうか。『アンダーグラウンド』における被害の語りは「社会のため」に持ち

出されている。そして被害者遺族である高橋の語りが出していたのは、想像力が痛みとして〈感覚〉されている側面であった。

戦争写真を題材に「他者の苦痛」を鑑賞することについて論じたソントグは、凄惨な写真を消費することが時に快楽を伴い、時に自らの特権的地位を隠ぺいする作用を持つことを鋭く見抜き、さらに写真と現実のあいだの想像では補うことができない絶対的な距離を強調した。しかしソントグは同時に、写真や映像の集積が担う倫理的役割や社会的機能についてポジティブに説いている。「残虐な映像をわれわれにつきまとわせよう。たとえそのような映像が象徴に過ぎず、それが言及している現実を到底網羅していなくても、それらはなお重要な機能を果たしている。映像は語りかける。人間はこんなことまでやるんですよ、熱意をもって独善的に、進んでやろうとさえするのですよ。覚えておきなさい」[Sontag 2003=2003:115]。本稿は、傷をともなう被害の語りの集積に、社会成員への教訓としての機能を託すことを批判してきた。ただしその上で、ソントグの次の省察に同意する。

「映像が提示するものについてわれわれが何もしないという挫折感は、そのような映像を眺めることの不当、あるいはそのような映像が流される仕方——それらが皮膚軟化薬、鎮痛剤、SUV（スポーツ汎用車）の広告にはさまれるかたちで流れることもある——の不当に対する非難へと転化されるかもしれない。映像が提示するものをなんとかできる力がわれわれにあったなら、われわれはこのような問題にこれほどこだわらないだろう」[同:117-118]

ソントグは、「他者の苦痛」をめぐる実践の不当性を問うことへ傾注する志向の本質を、戦争に向かおうとする社会に対する無力感や挫折感に定めている。ここで、本稿が被害の語りの扱いに照準してきたことは、本来拘るべき問題ではなかったと言いたいのではない。上記の引用は、私たちが突きつけられている問題が、始めからずっと社会の側の課題であったということに改めて気づかせてくれる。

どのようにして凄惨な出来事を記憶し、どのようにして繰り返さないかと誓えるのか。どのように出来事の原因を見定め、どのように解決するのか。そして、被害者の社会的包摂をいかにして実現するのか。これらの問いは私たちの社会にとってとても重く大切な課題である。そして、被害にあった当事者に課せらるものではない。

最後に、現在、歴史学や博物館学など様々な分野においてオーラル・ヒストリーの重要性やデジタル・アーカイブの必要性が共有されており、理論化や技術開発が積極的になされている。本稿は、それらの興隆に反するものではない。本稿は「誰にとって、なぜ良いのか（あるいは良くないのか）」という視角から「社会における効用」と「当事者における効用」に照準して検討する作業を通して、被害の語りをめぐるアーカイブを支える理論的基盤の整備を試みるものである。「語り」を要請する社会機制についての注意深い考察は、アーカイブの意義を再照射するにとどまらない。「傷」の救済や回復をめぐる学術的・社会的課題において常に立ち戻るべき当事者の視座を知らせるものである。

注

- 1) 例えば文芸批評家は本著を村上作品の一つとしてその系譜に位置付けようと試みるが、そうした見方からすれば、村上が地下鉄サリン事件という「社会的」で「現実的」な出来事に関心を寄せノンフィクションに取り組んだとは大きな衝撃であった。評論家は『アンダーグラウンド』における村上の仕事や「デタッチメントからコミットメントへ」という主題の転換として論じ、また新聞等においても「村上春樹 変化を語る」などという見出しで「転向意図」が大きく注目された〔川本 1997 → 2006〕〔津田 1997〕〔朝日新聞 1997 年 6 月 4 日夕刊〕。
- 2) 「犯罪被害者の実名報道の意義」を問う東京大学の入学試験問題に参照されたことなどから、『アンダーグラウンド』は犯罪被害者をめぐる法的立場やマスコミ報道についての重要な問題提起を行った書き物として理解されていることが伺える。〔2006 年 3 月、文科一類入学試験・後期日程〕。
- 3) 必ずしも現実の時間軸に即さず、感情の流れに沿って緩やかに当日の経験に接近するようなこのインタビューの形式は、精神科医・野田正彰によれば、まさに精神科医の行う主観的面接法だという。〔野田 1997〕
- 4) 『アンダーグラウンド』では、被害者だけではなく、精神科医、事件当時治療に当たった医師、被害者の会を支援する弁護士へのインタビューも挟まれている。ただしそれらは、病院の治療体制や PTSD の概念、支援者から見た被害の実態など、あくまで個々の被害経験を補足する役割に留まる。
- 5) 被害者の経験を収集・保存・提示する行いの政治性についても注意が払われなければならない。収集・保存・提示は、常に対象の選別と捨象のうえにしか成立し得ないためである。「読まれるべき語り」とそうでない語りをより分けることは、対象そのものに権力の偏差を生じさせることに他ならない〔山口 2014a〕。
- 6) この経緯について高橋は、被害者の手記集をまとめた同時期に『アンダーグラウンド』の取材がはじまり、このことが被害者の会の内部に「微妙な反響を呼んだ」と述懐している。「被害者のなかには、熱烈な村上ファンの女性もいて、名前を聞いただけですっかり夢中になり、村上さんのインタビューを受け

たほうがよいと言った。しかし、雑誌に事件のことをよく書いていたフリーのライターがいいという意見の持ち主もいた。双方が自分の意見に固執して、互いに相手への不満を私に電話で言ってきたりもした」〔高橋 2008:63-64〕。結果として被害者の会としては協力せず個別対応となったが、高橋は自身が『アンダーグラウンド』に抵抗を感じた理由を次のように述べている。「サンプルとして受け取った未定稿を渡されて、私の気持ちはこわばっていった。それは、混乱のなかで、倒れた主人がちょうど取材中だったテレビ東京のワゴン車で病院に運ばれていくまでを目撃したという女性の話だった。私にとっては主人のことであったので、かなり神経質になってしまった」〔高橋 同:64〕。

■引用・参考文献

- ・地下鉄サリン事件被害者の会 1997『手記集——2年が過ぎていまでもまだ…被害者自らが綴った心情』, 地下鉄サリン事件被害者の会
- ・地下鉄サリン事件被害者の会 1998『それでも生きていく——地下鉄サリン事件被害者手記集』, サンマーク出版
- ・地下鉄サリン事件被害者の会 2007『私にとっての地下鉄サリン事件——事件発生12年を迎えて』
- ・Frank, Arthur W 1995 “*The Wounded Storyteller: Body, Illness, and Ethics*” The University of Chicago Press = 2002 鈴木智之訳, 『傷ついた物語の語り手』, ゆみる出版
- ・金菱清編 東北学院大学震災の記録プロジェクト 2012『3.11 慟哭の記録——71人が体感した大津波・原発・巨大地震』, 新曜社
- ・河合隼雄・村上春樹 1996『村上春樹、河合隼雄に会いにいく』, 岩波書店
- ・河合隼雄 1997「村上春樹『アンダーグラウンド』を読む——地下鉄サリン事件が教えること」『世界』636, 岩波書店, pp.279-291
- ・河合幹雄 2000「日本の被害者学と被害者運動の動向——人間性の回復へ」『犯罪社会学研究』25, pp.141-147
- ・川本三郎 2006「『社会派』への違和感——『アンダーグラウンド』」『村上春樹論集成』, 若草書房, pp.194-196 (初出:毎日新聞 1997年5月14日夕刊)
- ・Kleinman, Arthur, Das, Veene, Lock, Margaret 1997 “*SOCIAL SUFFERING*” The University of California Press.=2011 佐川雅子訳, 『他者の苦しみへの責任——ソーシャル・サファリングを知る』, みすず書房
- ・小西聖子 2006『犯罪被害者の心の傷』, 白水社
- ・宮地尚子 2005『トラウマの医療人類学』, みすず書房
- ・宮澤浩一・田口守一・高橋則夫 1996『犯罪被害者の研究』, 成文堂
- ・村上春樹 1997『アンダーグラウンド』, 講談社
- ・村上春樹 1998『約束された場所で——underground2』, 文藝春秋
- ・村上春樹 2011『雑文集』, 新潮社
- ・中島聡美 1998「地下鉄サリン事件について——被害者から事件を見ることの重要性」『被害者学研究』8, 日本被害者学会, pp.78-82
- ・野田正彰 1992『喪の途上にて——大事故遺族の悲哀の研究』, 岩波書店
- ・野田正彰 1997『隠された動機——ノンフィクション作家からフィクション作家へ』『群像』52 (5), 講談社, p.272-278
- ・小川伸彦 2002「モノと記憶の保存」『文化遺産の社会学——ルーヴル美術館から原爆ドームまで』荻野昌弘編, 新曜社, pp.34-70
- ・大塚英志 2004『サブカルチャー文学論』, 朝日新聞社
- ・佐藤恵 2003「犯罪被害者の「回復」とその支援——交通犯罪被害者遺族における被害者化過程の事例研究を通して」『犯罪社会学』28, pp.96-109
- ・Sontag, Susan 2003 “*REGARDING THE PAIN OF OTHERS*” Farrar, Straus and Giroux, New York.=2003 北条文緒訳, 『他者の苦痛へのまなざし』, みすず書房
- ・鈴木智之 2009『村上春樹と物語の条件——『ノルウェイの森』から『ねじまき鳥クロニクル』へ』, 青弓社
- ・高橋シズエ 1997「『地下鉄サリン』これだけは言いたい」『新潮』45, pp.181, 新潮社, pp.54-62
- ・高橋シズエ 2002「地下鉄サリン事件から7年、今も消えない「心のシワ」を抱えて」『婦人公論』87 (14), 中央公論新社, pp.30-33
- ・高橋シズエ 2008『ここにいること——地下鉄サリン事件の遺族として』, 岩波書店
- ・津田孝 1997「村上春樹『アンダーグラウンド』論——その現代的な意義と反響をめぐって」『民主文学』386-436, 日本民主主義文学会, pp.102-112
- ・山口真紀 2009「〈自己物語論〉再考——アーサー・フランクの議論を題材に」『Core Ethics』5, 立命館大学大学院先端総合学術研究科, pp.351-360
- ・山口真紀 2014a「『被害』の語りのアーカイビング——実践と、実践のための論理」人間科学研究所年次総会・私立大学戦略的研究基盤形成支援事業公開研究会「インクルーシブ社会に向けた支援の〈学=実〉連環型研究キックオフミーティング——対人支援における大学と社会実践の連携」, 立命館大学
- ・山口真紀 2014b「『傷』への処方——帰属をめぐる見取り図作成のために」『現代思想』9, 青土社, pp.212-223
- ・吉田司 1997「オウムはわが友」, 『文学界』51 (6), 文芸春秋, pp.249-252
- ・朝日新聞 19970604「『アンダーグラウンド』傷を訴える物語(村上春樹 変化を語る:上)」
- ・NHK「東日本大震災アーカイブ——証言webドキュメント」
<https://www9.nhk.or.jp/archives/311shogen/> (2017/05/02 閲覧)

Consideration about the archiving of victim's narratives: Focus on Haruki Murakami's *Underground*

Maki YAMAGUCHI

The purpose of this paper is to carefully examine the logical basis that supports archiving victim's narratives from the perspective of "Why and for whom it is beneficial". This paper draws attention to Haruki Murakami's *Underground*, which features interviews with victims of the Tokyo subway sarin gas attack. In this study, the effect of Murakami's effort to archive the narratives of suffering has been reconsidered from the opinions of the parties concerned upon organizing Murakami's intentions. Murakami attempted to imbue the richness of the victims' narratives with "reality" to overwhelm each and every social member who supposedly "lacks imagination". Here, the victims' narratives are used as a "tool" to awaken those who, according to Murakami's assumption, are insensitive members of society. What steers this novel is Murakami's own distrust of the <sensitivity> of these social members. The violence of relying on <sensitivity> is discussed in the conclusion.

Keywords : archiving of the victim's narratives, Haruki Murakami, Underground, imagination, sensitivity